

代数曲線に関する Grothendieck 予想 — p 進幾何の視点から

望月 新一 (京大数理研)

I. 入門

- A. 双曲型リーマン面の一意化
- B. 数論的基本群
- C. 結果
- D. モジュラー形式

(A.) 双曲型リーマン面の一意化

X : 双曲的曲線/ \mathbf{C} : 滑らかで、

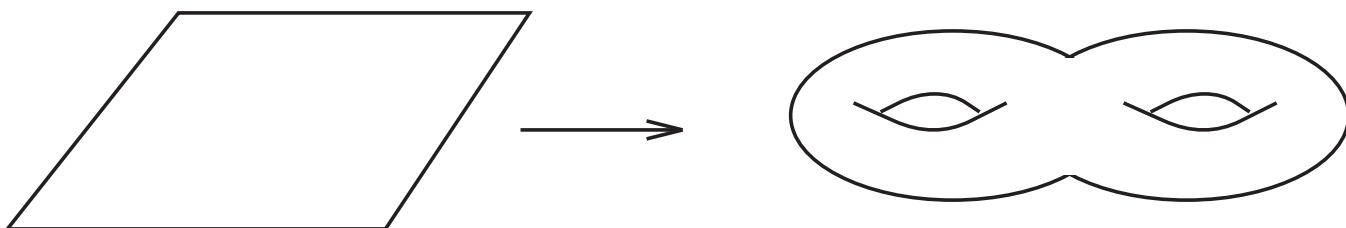
proper、連結な種数 g の代数曲線

– r 個の点、s.t. $2g - 2 + r > 0$

\rightsquigarrow 双曲的リーマン面 \mathcal{X}

Köbe の一意化定理:

\mathcal{X} の普遍被覆 $\tilde{\mathcal{X}} \cong$ 上半平面 \mathcal{H}



言い換えれば：

「 X という (純) 代数的なものが、
 $\mathcal{H}/\pi_1(\mathcal{X})$ という幾何的ないし解析的な
表示をもつ」

つまり、

$$\text{代数曲線 } X \iff \pi_1(\mathcal{X}) \curvearrowright \mathcal{H}$$

ここで、

$$\begin{array}{ccc} \text{右辺} = \pi_1(\mathcal{X}) + \text{ある「数論的」なデータ} & & \\ \uparrow & & \uparrow \\ [\text{モジュライによらず}] + [\text{モジュライによる}] & & \end{array}$$

(ただし、ここで、

「数論的」 = 「無限素点における数論」)

(B.) 数論的基本群

K : (標数 0 の) 体 ;

X_K : K 上の代数多様体

すると、 $X_K \mapsto \pi_1(X_K)$

...(compact な) 副有限 (profinite) 群、
 X_K の有限次エタール被覆を統制する。

(例えば : $K = \mathbf{C}$ のとき、

π_1^{top} (対応する複素多様体 \mathcal{X})

の副有限完備化。)

K が閉体でない時、

$$1 \rightarrow \pi_1(X_{\overline{K}}) \rightarrow \pi_1(X_K) \rightarrow \text{Gal}(\overline{K}/K) \rightarrow 1$$

用語：

幾何的基本群 $\pi_1(X_{\overline{K}})$

ガロア群 $\Gamma_K \stackrel{\text{def}}{=} \text{Gal}(\overline{K}/K)$

数論的基本群 $\pi_1(X_K)$

K =標数 0 \implies 幾何的基本群は $X_{\overline{K}}$ の
モジュライによらず

(曲線するとき、 (g, r) だけで決まる)

K =標数 p \implies 幾何的基本群は $X_{\overline{K}}$ の
モジュライを決定しがち

(玉川：種数 = 0 とき)

以下では、上の系列の商を考える：

まず、素数 p を固定する。

$\Delta_X \stackrel{\text{def}}{=} \pi_1(X_{\overline{K}})$ の最大 pro- p 商

$\Pi_{X_K} \stackrel{\text{def}}{=} \Delta_X / \text{Ker}(\pi_1(X_{\overline{K}}) \rightarrow \Delta_X)$

すると、

$$1 \rightarrow \Delta_X \rightarrow \Pi_{X_K} \rightarrow \Gamma_K \rightarrow 1$$

$$\implies \Gamma_K \rightarrow \text{Out}(\Delta_X) \stackrel{\text{def}}{=} \text{Aut}(\Delta_X) / \text{Inn}(\Delta_X)$$

「 Γ_K が Δ_X に外作用する。」

(情報として、外作用 \iff 上の完全系列、
モジュライによる！)

つまり、

$$X_K \mapsto \{ \pi_1(X_{\overline{K}}) + \Gamma_K \curvearrowright \pi_1(X_{\overline{K}}) \}$$

$$\text{又は } \{ \Delta_X + \Gamma_K \curvearrowright \Delta_X \}$$

(形は \mathbf{C} 上の一意化定理を連想させる！)

\rightsquigarrow 自然な問い掛け：「 \mapsto 」は（何らかの意味で）「 \leftrightarrow 」で置き換えることはできないか？

これがいわゆる「**Grothendieck 予想**」

(X_K = 双曲的曲線、又は「遠アーベル」

(anabelian) な多様体、

K = 「十分に数論的」な体)

(C.) 結果

K : 「劣 p 進体」 $\subseteq \mathbf{Q}_p$ 上有限生成な体

例 K : \mathbf{Q} 上有限生成

K : \mathbf{Q}_p 上有限生成

$$K = \bigcup_{[K':\mathbf{Q}] \leq N} K'$$

定理 1

X_K : 双曲的代数曲線 / K

S_K : smooth 代数多様体 / K

このとき、

$$\begin{aligned} X_K(S_K)^{\text{dom}} &\xrightarrow{\sim} \text{Hom}_{\Gamma_K}^{\text{open}}(\pi_1(S_K), \pi_1(X_K)) \\ &\xrightarrow{\sim} \text{Hom}_{\Gamma_K}^{\text{open}}(\Pi_{S_K}, \Pi_{X_K}) \end{aligned}$$

定理 2

L, M : 関数体 $/K$ (任意次元)

このとき、

$$\mathrm{Hom}_K(M, L) \xrightarrow{\sim} \mathrm{Hom}_{\Gamma_K}^{\mathrm{open}}(\Gamma_L, \Gamma_M)$$

注 :

- (i) ある条件を満たす「双曲的な曲面」に関する「曲面版」もある。
- (ii) 左辺を「代数曲線 X_K の代数的な点」、右辺を「 Π_{X_K} という解析的な対象の点」とみれば、Köbe の定理と形が類似している。実際、ちょうどこのことにヒントを得て、「p 進幾何」で証明する。

- (iii) 元々は、アーベル多様体の Tate 予想の類似 \implies Tate 予想と同様、大域的な数体の上でしか成立しないものとして考えられていた。つまり、(ii) のような視点は予想当時なかったらしい。その原因の一 (?): アーベル多様体の Tate 予想は p 進体上では成立しない。
- (iv) 定理 1 以前に、標数 0 の絶対有限生成体の上では、
- ・ 中村博昭氏 (種数 0、Isom 版)
 - ・ 玉川安騎男氏 (アフィン、Isom 版)
- の結果があり、特に、中村氏が有効に使い、玉川氏が本質的に改良した「被覆の塔を組織的に利用する」手法は定理 1 の証明でも生きている。
- (v) K が \mathbf{Q} 上有限生成の時、定理 2 の Isom 版は Pop の定理。

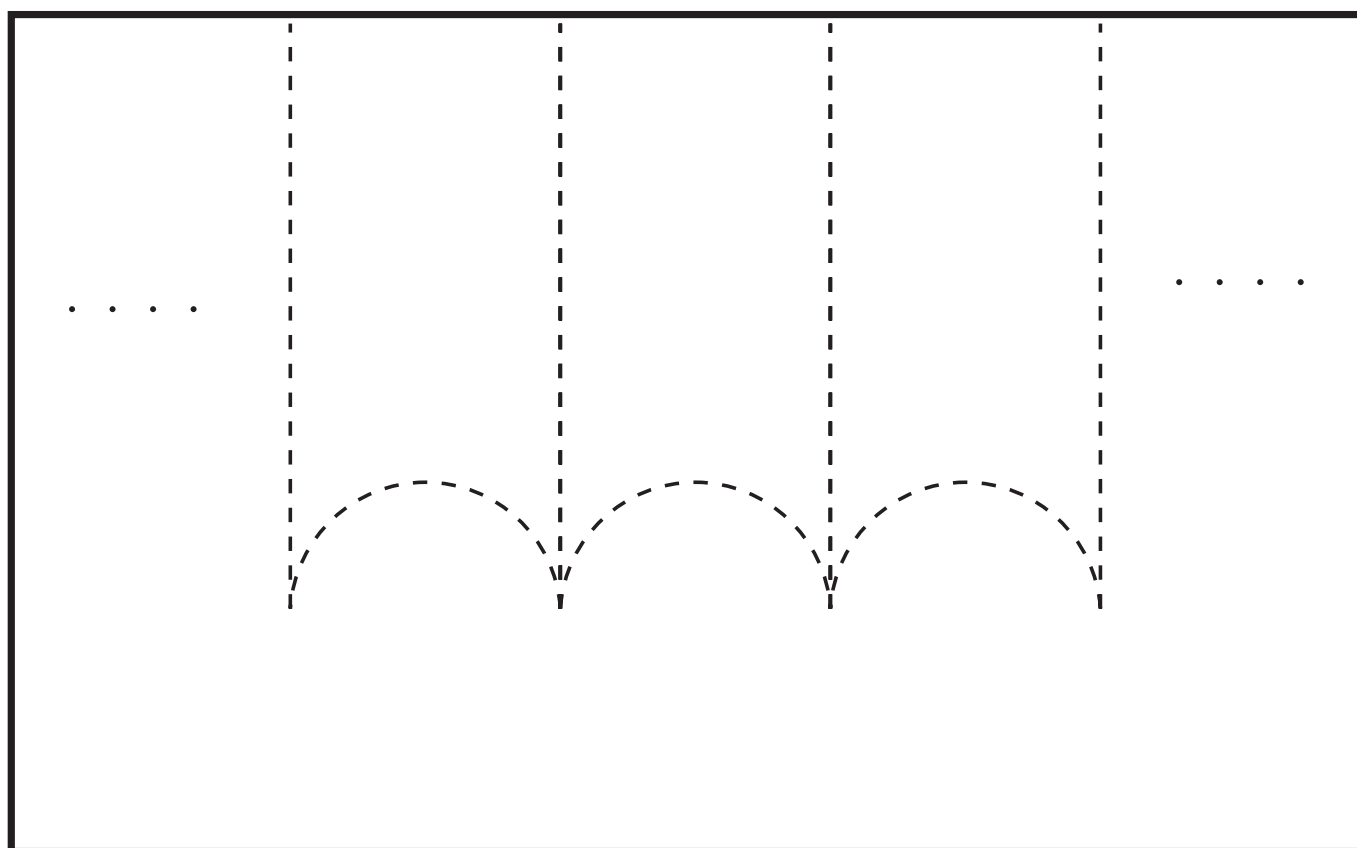
(D.) モジュラー形式

問題: 一体どうやって $\{\Delta_X + \Gamma_K \curvearrowright \Delta_X\}$
から代数曲線 X_K を復元するか?

ヒント: \mathbf{C} 上の場合、上半平面 \mathcal{H} 上で
モジュラー形式を解析的に製造して
射影空間への埋め込みを構成する。

(例: 志村多様体の構成, e.g.,
 $\mathcal{H}/SL_2(\mathbf{Z})$, Poincaré 級数等)

上半平面 \mathcal{H}	\rightarrow	射影空間
\downarrow	\curvearrowright	\parallel
代数曲線	\hookrightarrow	射影空間



$SL_2(\mathbf{Z})$ の場合

ポイント : モジュラー形式の解析的な表示
を考える。

\implies これと類似的なことを「 p 進の世界」
でやりたい。

\implies 「 p 進 Hodge 理論」 を用いる。

Grothendieck 予想

多様体の射	比較 \longleftrightarrow	基本群 (の射)
「代数幾何」 「多項式 =関数」		「étale 位相+ Galois 作用」

p 進 Hodge 理論

p 進体上の代数多様体に対して

de Rham (crystalline) cohomology 「多項式 =関数、 その微分」	比較 \longleftrightarrow	p 進 étale cohomology 「étale 位相+ Galois 作用」
---	-----------------------------	---

簡単のため、 $[K : \mathbf{Q}_p] < \infty$,
 $X_K = \overline{X}_K$, non-hyperelliptic
と仮定する。

$$\implies \Delta_X^{\text{ab}} \simeq T_p(J_{X_{\overline{K}}})$$

($J_{X_{\overline{K}}}$: $X_{\overline{K}}$ の Jacobi 多様体)

Hodge-Tate 分解 ($\mathbf{C}_p = \widehat{K}$) :

$$\Delta_X^{\text{ab}} \otimes_{\mathbf{Z}_p} \mathbf{C}_p \cong \{D_X \otimes_K \mathbf{C}_p\} \oplus \{D_X^\vee \otimes_K \mathbf{C}_p(1)\}$$

ただし、 $D_X \stackrel{\text{def}}{=} H^0(X_K, \omega_{X_K/K})$

なお、non-hyperelliptic \implies

$$X_K \hookrightarrow P_X \stackrel{\text{def}}{=} \mathbf{P}(D_X)$$

従って、 X_K と同じ仮定を満たす Y_K と、 Γ_K の外作用と両立する

$$\Delta_X \cong \Delta_Y$$

が与えられたら、

$$\implies \Delta_X^{\text{ab}} \cong \Delta_Y^{\text{ab}}$$

$$\implies D_X = (\Delta_X^{\text{ab}} \otimes \widehat{K})^{\Gamma_K}$$

$$\cong (\Delta_Y^{\text{ab}} \otimes \widehat{K})^{\Gamma_K} = D_Y$$

\Downarrow

$$\mathbf{P}(D_X) = \begin{array}{c} P_X \\ \cup \\ X_K \end{array} \cong \begin{array}{c} P_Y \\ \cup \\ Y_K \end{array} = \mathbf{P}(D_Y)$$

$X_K \xrightarrow{?} Y_K$

$$\begin{array}{ccc}
 P_X & \cong & P_Y \\
 \cup & & \cup \\
 X_K & \xrightarrow{?} & Y_K
 \end{array}$$

問題 : X_K, Y_K を定義する (多項式型)
 関係式が保たれるかどうか。

「関係式の保存」

$D_X = H^0(X_K, \omega_{X_K/K})$ の元たち、つまり、

モジュラー形式の (\mathfrak{p} 進) 解析的表示

を使って証明する。

代数曲線に関する Grothendieck 予想 — p 進幾何の視点から

望月 新一 (京大数理研)

II. p 進 Hodge 理論

- A. 射影空間の間の射
- B. 上半平面の代替物の登場
- C. Faltings の理論
- D. J -幾何性
- E. Malčev 完備化の p 進 Hodge 理論

(A.) 射影空間の間の射

前回 : $[K : \mathbf{Q}_p] < \infty$;

双曲的曲線 X_K, Y_K ;

$\Gamma_K \curvearrowright \Delta_X \cong \Delta_Y$ から出発して

↓

$$D_X = (\Delta_X^{\text{ab}} \otimes \widehat{K})^{\Gamma_K} \cong (\Delta_Y^{\text{ab}} \otimes \widehat{K})^{\Gamma_K} = D_Y$$

ただし、 $D_X \stackrel{\text{def}}{=} H^0(X_K, \omega_{X_K})$

$D_Y \stackrel{\text{def}}{=} H^0(Y_K, \omega_{Y_K})$

↓

$$\mathbf{P}(D_X) = \begin{array}{c} P_X \\ \cup \\ X_K \end{array} \cong \begin{array}{c} P_Y \\ \cup \\ Y_K \end{array} = \mathbf{P}(D_Y)$$

$\begin{array}{ccc} & ? & \\ & \dashrightarrow & \end{array}$

「関係式の保存」

$\iff \forall i \geq 1, \text{ 合成}$

$$\mathcal{R}_i \subseteq \otimes^i D_X \xrightarrow{\sim} \otimes^i D_Y \rightarrow D_Y^i$$

は、0か？

ただし、

$$D_X^i \stackrel{\text{def}}{=} H^0(X_K, \omega_{X_K}^{\otimes i})$$

$$D_Y^i \stackrel{\text{def}}{=} H^0(Y_K, \omega_{Y_K}^{\otimes i})$$

$$\mathcal{R}_i \stackrel{\text{def}}{=} \text{Ker}(\otimes^i D_X \rightarrow D_X^i)$$

↑
「関係式」

(B.) 上半平面の代替物の登場

\exists *stable* $\mathcal{Y} \rightarrow \text{Spec}(\mathcal{O}_K)$ s.t.

$\mathcal{Y} \otimes_{\mathcal{O}_K} K = Y_K$ と仮定しよう。

なお、 $\wp \in \mathcal{Y} \otimes_{\mathcal{O}_K} k$ が、

special fiber 中 generic だと仮定する。

\Downarrow

$\mathcal{O}_L \stackrel{\text{def}}{=} (\widehat{\mathcal{O}}_{\mathcal{Y}, \wp}^{\text{unram}})^{\wedge}; \Omega_L \stackrel{\text{def}}{=} \{L \text{ の連続な微分} \}$

$\implies \dim_L(\Omega_L) = 1;$

\exists 同義反復的な $\xi_Y : \text{Spec}(L) \rightarrow \mathcal{Y};$

「関係式の保存」 \iff

$\mathcal{R}_i \rightarrow D_Y^i \xrightarrow{\xi_Y} \Omega_L^{\otimes i}$ が 0 になる

つまり、

$$\overset{i}{\otimes} D_X \rightarrow \Omega_L^{\otimes i}$$

を計算して、その $\mathcal{R}_i \subseteq \overset{i}{\otimes} D_X$ への制限が 0 になることを言いたい。

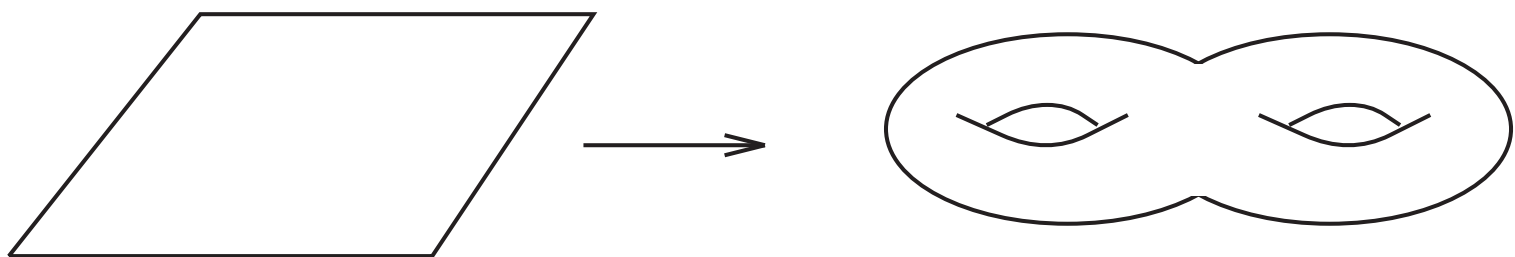
注：

(i) $D_Y \rightarrow \Omega_L$ は「モジュラー形式の解析的展開」のようなもの。

↓

$\mathrm{Spf}(\mathcal{O}_L)$ は上半平面の役を演じている。

(ii) 次節では、この展開を「 π_1 」の言葉に翻訳して、 $D_X \rightarrow \Omega_L$ を計算する。



$$\mathrm{Spf}(\mathcal{O}_L) \rightarrow \mathcal{Y}$$

(iii) 実際、

$$\mathcal{O}_L \cong \{(\mathbf{Z}_p[t])_{(p)}^{\wedge, \text{unram}}\}^{\wedge}$$

特に、 $\mathrm{Spf}(\mathcal{O}_L)$ は、 Y_K (のモジュライ) によらない、幾何的次元 = 1 の幾何的対象。つまり、 $\mathrm{Spf}(\mathcal{O}_L)$ は本当に Y_K を「一意化」しているのである。

言い換えれば、「 $\mathrm{Spf}(\mathcal{O}_L)$ 」の構成は、 Y_K から出発しようと、 X_K から出発しようと、変わらないので、 X_K と Y_K を比較するのに「適任」である。

(C.) Faltings の理論

$$\Gamma_{L/K} \stackrel{\text{def}}{=} \text{Ker}(\Gamma_L \rightarrow \Gamma_K) = \Gamma_{L \cdot \bar{K}}$$

⇒ Faltings, 兵頭 治氏 :

∃ 自然で、 Γ_K -同変な同形

$$H^1(\Gamma_{L/K}, \widehat{L}(1)) \cong \Omega_L \widehat{\otimes}_K \widehat{K}$$
$$t^{1/p^\infty} \quad \leftrightarrow \quad (dt/t)$$

両辺 : “log” っぽいもの $\cdot L \widehat{\otimes}_K \widehat{K}$

「局所的な Hodge-Tate 分解」:

張り合わせたら ⇒

普通の Hodge-Tate 分解

これで、微分形式の展開写像 $D_Y \rightarrow \Omega_L$ を完全に π_1 の言葉に翻訳できる:

$$\begin{array}{ccc}
 H^1(\Delta_Y, \widehat{K}(1))^{\Gamma_K} & \rightarrow & H^1(\Gamma_{L/K}, \widehat{L}(1)) \\
 \parallel & & \uparrow \wr \\
 D_Y & \rightarrow & \Omega_L \widehat{\otimes}_K \widehat{K}
 \end{array}$$

この図式を次の図式の右にくっつけると、

$$\begin{array}{ccc}
 H^1(\Delta_X, \widehat{K}(1))^{\Gamma_K} & \xrightarrow{\sim} & H^1(\Delta_Y, \widehat{K}(1))^{\Gamma_K} \\
 \parallel & & \parallel \\
 D_X & \xrightarrow{\sim} & D_Y
 \end{array}$$

(下の行の合成) $^{\otimes i}$ = 計算したいもの

上の行の合成 = π_1 の世界のもの

さて、写像

$$\alpha_Y \stackrel{\text{def}}{=} \pi_1(\xi_Y) : \Gamma_L \rightarrow \Pi_{Y_K}$$

と、与えられた同形

$$\Pi_{Y_X} \cong \Pi_{X_K}$$

の合成を $\alpha_X : \Gamma_L \rightarrow \Pi_{X_K}$ と書くと、

($*^{\text{geom}}$) α_X が、

$\exists \xi_X : \text{Spec}(L) \rightarrow X_K$ から生じる。

つまり、 α_X が「幾何的」になるかどうかを問うことができる。

もし $(*^{\text{geom}})$ が成立すれば、先ほどの
「合成可換図式」

$$\begin{array}{ccc}
 H^1(\Delta_X, \widehat{K}(1))^{\Gamma_K} & \rightarrow & H^1(\Gamma_{L/K}, \widehat{L}(1)) \\
 \parallel & & \uparrow \wr \\
 D_X & \rightarrow & \Omega_L \widehat{\otimes}_K \widehat{K}
 \end{array}$$

の下の行が、(Faltings の理論の関手性より)
 ξ_X から生じることになる。

$$\implies \xi_X^*(\mathcal{R}_i) = 0$$

即ち、

$$(*^{\text{geom}}) \text{ 成立} \implies \text{「関係式の保存」 成立}$$

従って、 $(*^{\text{geom}})$ を示せば、十分。

(D.) J-幾何性

$(*\text{geom}) \iff \{\alpha_X \text{ の幾何性}\}$
は難し過ぎる

↓

$$\text{合成} \quad \alpha_X^J : \Gamma_L \rightarrow \Pi_{X_K} \rightarrow \Pi_{J_{X_K}^{(1)}}$$

を考える。

ただし、 $J_{X_K}^{(1)}$ は X_K の Albanese :

$$1 \rightarrow \Delta_X^{\text{ab}} \rightarrow \Pi_{J_{X_K}^{(1)}} \rightarrow \Gamma_K \rightarrow 1$$

α_X^J の幾何性 (= ? $\in J_{X_K}^{(1)}(L)$ から生じる)
を、 α_X の **J-幾何性** と呼ぶ。本節と次節で
は、 α_X の **J-幾何性** について説明する。

準同形 α_X^J の幾何性:

(i) 幾何的な (= ? $\in Y_K(K)$ から生じる)

$$\beta_Y : \Gamma_K \rightarrow \Pi_{Y_K}$$

に対して、

$$\beta_X^J : \Gamma_K \rightarrow \Pi_{Y_K} \cong \Pi_{X_K} \rightarrow \Pi_{J_{X_K}^{(1)}}$$

の幾何性を示す。 (次節で詳述。)

(ii) 差 “ $\alpha_X^J - \beta_X^J$ ”

$$\in \text{Im}(H^1(\Gamma_L, \Delta_Y^{\text{ab}})) \subseteq H^1(\Gamma_L, \Delta_X^{\text{ab}})$$

の幾何性を示す。 (本節で説明。)

(ii) の証明 :

Tate の定理 $\implies \Delta_X^{\text{ab}} \cong \Delta_Y^{\text{ab}}$ は

$$\text{Formal gp.}(J_{X_K}) \cong \text{Formal gp.}(J_{Y_K})$$

から生じる。従って、

$$\text{差 “}\alpha_Y^J - \beta_Y^J\text{”} \in H^1(\Gamma_L, \Delta_Y^{\text{ab}})$$

は定義より幾何的 \implies この差を、上の同形で送っても、出てくる元

$$= \text{差 “}\alpha_X^J - \beta_X^J\text{”}$$

は依然として幾何的。証明終。

(E.) Malčev 完備化の p 進 Hodge 理論

準同形 $\beta_Y : \Gamma_K \rightarrow \Pi_{Y_K}$ は

$$1 \rightarrow \Delta_X \rightarrow \Pi_{X_K} \rightarrow \Gamma_K \rightarrow 1$$

の分裂を定義 $\implies \Gamma_K \xrightarrow{\beta_Y} \Delta_Y$

(外作用ではなく、本物の作用。)

\Downarrow

Δ_Y の (二次の) \widehat{K} 上の Malčev 完備化の「重さ 0」の商 (\iff (1), (2) 等、nonzero Tate twist がない最大のもの) が定義される :

$$0 \rightarrow \wedge^2 D_Y \otimes_K \widehat{K} \rightarrow \mathcal{Z}_Y \rightarrow D_Y \otimes_K \widehat{K} \rightarrow 0$$

\mathcal{Z}_Y : \widehat{K} 上の Lie 環、 Γ_K -加群。

ところが、Bloch-加藤の理論 + ある計算

↓

$\{\beta_Y^J \text{ の } J\text{-幾何性}\} \iff \{\mathcal{Z}_Y \text{ が 分裂する}\}$

(ただし、右辺 =

「上の Γ_K -加群の完全系列が分裂する」)

一方、定義より、

$$\{\overset{\beta_Y}{\curvearrowright} \Delta_Y\} \cong \{\overset{\beta_X}{\curvearrowright} \Delta_X\}$$

$$\implies \mathcal{Z}_Y \overset{\Gamma_K}{\cong} \mathcal{Z}_X$$

従って、上と組み合わせると、

$$\{\beta_Y \text{ の J-幾何性} \} \iff \{\beta_X \text{ の J-幾何性} \}$$

よって、(i) (= β_X^J の幾何性) が成立。

代数曲線に関する Grothendieck 予想 — p 進幾何の視点から

望月 新一 (京大数理研)

III. 有理点の構成

A. J -幾何性と Chern 類

B. 収束の設定

C. 収束の証明

D. 主定理の証明

(A.) J-幾何性と Chern 類

前回： 幾何的な

$$\alpha_Y \stackrel{\text{def}}{=} \pi_1(\xi_Y) : \Gamma_L \rightarrow \Pi_{Y_K}$$

と、与えられた同形 $\Pi_{Y_X} \cong \Pi_{X_K}$ から合成 $\alpha_X : \Gamma_L \rightarrow \Pi_{X_K}$ を作り、さらに

$$\alpha_X^J : \Gamma_L \rightarrow \Pi_{X_K} \rightarrow \Pi_{J_{X_K}^{(1)}}$$

の幾何性を示した。従って、合成

$$\Pi_{X_L} \xrightarrow{(\text{id}, \alpha_X)} \Pi_{X_L \times_L X_L} \longrightarrow \Pi_{X_L \times_L J_{X_L}^{(1)}}$$

も幾何的である。 (注： “[π_1 , 直積] = 0”)

$$c_1(\text{diagonal}) \in H^2(\Pi_{X_L \times_L X_L}, \mathbf{Z}_p(1))$$

を考えよう。初等的代数幾何から、この類

$$\in \mathbf{Q} \cdot \text{Im}\{c_1(\mathcal{M}) \in H^2(\Pi_{X_L \times_L J_{X_L}^{(1)}}, \mathbf{Z}_p(1))\}$$

\implies (上の合成の幾何性 +

Kummer exact sequence より)

$$\eta_X = c_1(\exists \mathcal{L}) + \text{torsion}$$

ただし、

$$\eta_X \stackrel{\text{def}}{=} (\text{id}, \alpha_X)^* c_1(\text{diagonal})$$

は「人工的な $c_1(\mathcal{O}_{X_L}(\xi_X))$ 」。

注： 本当の ξ_X の存在はまだ分からない。

\implies (「 $\deg(\mathcal{L})$ は自動的に 1 になる」より)

X_L 上に $\deg=1$ の line bundle が存在する!

$$\implies \mathcal{L}^{\otimes m} = \mathcal{O}_{X_L}(D)$$

ただし、

m = 大、 p と素

$$D = \bigcup \text{Spec}(L_i); \quad [L_i : L] < \infty$$

$$\implies ([\exists L_i : L], p) = 1$$

$$\implies L_i/L \text{ tamely ramified!}$$

結論: $Y_K(L)$ 非退化 $\neq \emptyset \implies X_K(L^{\text{tm}}) \neq \emptyset$

(B.) 収束の設定

準同形 $\alpha_{Y_L} : \Gamma_L \rightarrow \Pi_{Y_L}$ から出発して、
 $\forall i \geq 0$ に対して、部分群を定義：

$$\Delta_{Y^i} \stackrel{\text{def}}{=} (\text{Image}(\alpha_{Y_L})) \cdot \Delta_Y^{<i>} \subseteq \Pi_{Y_L}$$

ただし、

$$\Delta^{<0>} \stackrel{\text{def}}{=} \Delta$$

$$\Delta^{<i+1>} \stackrel{\text{def}}{=} (\Delta^{<i>})^p \cdot [\Delta^{<i>}, \Delta^{<i>}]$$

↓

幾何的に連結（なぜなら、 $\Delta_{Y^i} \twoheadrightarrow \Gamma_L$ ）な
有限次étale 被覆の塔が発生：

$$\dots \rightarrow Y_L^{i+1} \rightarrow Y_L^i \rightarrow \dots \rightarrow Y_L$$

同様に、 $\alpha_{X_L} : \Gamma_L \rightarrow \Pi_{X_L}$ に対しても、
被覆の塔が定義される：

$$\dots \rightarrow X_L^{i+1} \rightarrow X_L^i \rightarrow \dots \rightarrow X_L$$

ところが、 $\alpha_Y = \pi_1(\xi_Y)$ は幾何的、

$$\text{Image}(\alpha_{Y_L} : \Gamma_L \rightarrow \Pi_{Y_L}) \subseteq \Delta_{Y^i}$$

↓

$\xi_Y \in Y_L(L)$ は自然な $\xi_Y^i \in Y_L^i(L)$ に持ち
上がり、(A.) の「結論」を適用すると、

↓

$$\forall i \geq 0, X_L^i(L^{\text{tm}}) \neq \emptyset$$

収束定理：このような状況の下、 $\forall i \geq 0$,

$$\xi_{X^i}^i \in X_L^i(L^{\text{tm}}); \quad \xi_X^i \stackrel{\text{def}}{=} \text{Image}_X(\xi_{X^i}^i)$$

\Downarrow

$$\xi_X^i \xrightarrow{p \text{ 進}} \exists! \xi_X \in X_L(L) \subseteq X_L((L^{\text{tm}})^\wedge)$$

$$\text{s.t. } \alpha_X = \pi_1(\xi_X).$$

注:

(i) この定理の証明は次節で紹介する。

(ii) これで、 $(*^{\text{geom}})$ の証明は完結する。

従って、定理 1 の証明も完結するが、長くて複雑なので、(D.) で復習する。

(iii) このように被覆の塔を組織的に利用するという手法は、Anderson-伊原や中村の仕事にまで遡り、ここでは、玉川の証明にやや近い形で援用している。

ただし、玉川の場合、基礎体は有限体だったため、収束は自動的。つまり、 p 進 Hodge 理論のような難しい理論の力を借りて上の「収束定理」のようなものを証明する必要はなかった。

(C.) 収束の証明

次の可換図式に注意しよう：

$$\begin{array}{ccccc}
 & & \text{“}\Delta_{X^i}\text{”} & & \\
 & & \parallel & & \\
 \Gamma_L & \xrightarrow{\pi_1(\xi_{X^i}^i)} & \Pi_{X_L^i} & \longrightarrow & \Gamma_L \\
 \parallel & & \cap & & \text{“}\alpha_X\text{”} \downarrow \\
 \Gamma_L & \xrightarrow{\pi_1(\xi_X^i)} & \Pi_{X_L} & \longrightarrow & \Pi_{X_L} / \Delta_X^{<i>}
 \end{array}$$

(ただし、上の行の合成は id_{Γ_L} である。)

つまり、modulo $\Delta_X^{<i>}$,

$$\text{“}\alpha_X\text{”} \equiv \pi_1(\xi_X^i) : \Gamma_L \rightarrow \Pi_{X_L}$$

もし、仮に $i = \infty$ だったとすると、Faltings の理論の関手性、即ち (II.) (C.) の可換図式

$$\begin{array}{ccc}
 H^1(\Delta_X, \widehat{K}(1)) & \xrightarrow{\pi_1(\xi_X^i)^*} & H^1(\Gamma_{L/K}, \widehat{L}(1)) \\
 \cup & & \parallel \\
 D_X \otimes_K \widehat{K} & \xrightarrow{d\xi_X^i} & \Omega_L \widehat{\otimes}_K \widehat{K}
 \end{array}$$

の上の行が完全に決まってしまう

↓

$\xi_X^{i=\infty}$ の P_X における射影座標 (= 下の行) も、完全に決まることになる。

つまり、 $\xi_X^{i=\infty} \in X_L(L) \subseteq P_X(L)$ 自身も完全に決まる。

勿論、実際には、 $i \neq \infty$ だが、Faltings の理論の「 p 進的連続性」から、 $\forall i \geq 0$,

$$\begin{aligned} \text{“}\alpha_X\text{”} &\equiv \pi_1(\xi_X^i) : \Gamma_L \rightarrow \Pi_{X_L} \text{ modulo } \Delta_X^{<i>} \\ &\quad \downarrow \end{aligned}$$

ξ_X^i の射影座標も、 $\text{mod } p^{i-\exists c}$ で決まる。

ところが、 $X_K \subseteq P_X \implies$ これで点列 $\{\xi_X^i\}$ が p 進的に収束することが分かる。

極限の一意性や性質も、同様な議論より従う。

(D.) 主定理の証明

定理 1

K : 「劣 p 進体」 $\subseteq \mathbf{Q}_p$ 上有限生成な体

X_K : 双曲的代数曲線/ K

S_K : smooth 代数多様体/ K

このとき、

$$\begin{aligned} X_K(S_K)^{\text{dom}} &\xrightarrow{\sim} \text{Hom}_{\Gamma_K}^{\text{open}}(\pi_1(S_K), \pi_1(X_K)) \\ &\xrightarrow{\sim} \text{Hom}_{\Gamma_K}^{\text{open}}(\Pi_{S_K}, \Pi_{X_K}) \end{aligned}$$

証明: $[K : \mathbf{Q}_p] < \infty$ の場合にすぐ帰着。

$\implies p$ 進 Hodge 理論使用可。

なお、簡単のため、 $X_K, S_K = Y_K$ が proper, non-hyperelliptic な双曲的曲線であると仮定しよう。

簡単のため、任意の open な準同形ではなく
同形 $\Gamma_K \curvearrowright \Delta_X \cong \Delta_Y$ から出発して、

$$D_X = (\Delta_X^{\text{ab}} \otimes \widehat{K})^{\Gamma_K} \cong (\Delta_Y^{\text{ab}} \otimes \widehat{K})^{\Gamma_K} = D_Y$$

ただし、 $D_X \stackrel{\text{def}}{=} H^0(X_K, \omega_{X_K})$

$$D_Y \stackrel{\text{def}}{=} H^0(Y_K, \omega_{Y_K})$$

↓

$$\begin{array}{ccccc} \mathbf{P}(D_X) & = & P_X & \cong & P_Y & = & \mathbf{P}(D_Y) \\ & & \cup & & \cup & & \\ & & X_K & \overset{?}{\dashrightarrow} & Y_K & & \end{array}$$

「関係式の保存」

曲線 Y_K の stable model $\mathcal{Y} \rightarrow \text{Spec}(\mathcal{O}_K)$ に対して、同義反復的な「点」

$$\text{Spec}(L) \rightarrow Y_K$$

を作る。ただし、

$$L \stackrel{\text{def}}{=} (\mathcal{O}_{\mathcal{Y}, \wp}^{\text{unram}})^{\wedge} \text{ の商体}$$

$\wp = \mathcal{Y}$ の special fiber の \exists generic point

すると、「 π_1 の関手性」より、準同形

$$\alpha_Y : \Gamma_L \rightarrow \Pi_{Y_K}$$

や、 α_Y と与えられた同形との合成が定義される：

$$\alpha_X : \Gamma_L \rightarrow \Pi_{X_K}$$

しかも、「関係式の保存」を言うには、

α_X の幾何性

($=? \in X_K(L)$ から生じる) を言えばよい。

ところが、 α_X の幾何性を直接証明することは難し過ぎる。従って、

$\alpha_X^J : \Gamma_L \rightarrow \Pi_{J_{X_K}^{(1)}}$ の幾何性を、

Bloch-加藤の理論等を使って証明する。

↓

Chern 類の議論より、 $X_L(L^{\text{tm}}) \neq \emptyset$

最後に、 α_X を使って、 X_L の被覆の塔を作り、上の tame 有理点の存在から、この塔の各被覆が tame 有理点を持つことを帰結する。

↓

その点たちが「 ξ_X 」に p 進収束し、しかも、

$$\alpha_X = \pi_1(\xi_X)$$

↓

α_X は幾何的。

証明終。